



私は本が好き

私は本が好き、本を読むことが好きだ。書店に立ち寄り、背表紙を眺め、好きな作家の本や、おもしろそうなタイトルに出会うと手に取って時間を忘れてしまう。最近では、散歩を兼ねて図書館に通う。館内の本の谷間を歩くことや、本を読んでいる人たちを眺めるのもおもしろいのだ。

本に囲まれて、好きなだけ読んでいたいと夢見ていたこともあったが、今、時間があって積んである本もたくさんあるのに、なかなか読み進まない。老眼で目が疲れ、集中力が続かない、読んでいる内容が頭に入らず、すぐに忘れてしまうなど読めない理由がたくさんある。友人から面白いと勧められたものや、書評を読んで興味を持つ本など、読みたい気持ちはどんどんふくらんで気合を入れて読み始めるのだが、長続きしない。それでも、読みながらその展開にワクワクドキドキしたり、期待外れにがっかりしたり、その場の気持ちを楽しむ読書をしている。

もう一つ私の楽しみがある。街中の本屋さんが経営難でなくなっているという現状があるが、シェア型書店が現れた事である。シェア型書店とは、書店内にある本棚の区画ごとに「棚主」と呼ばれる店主がいて、自分が好きな本を販売する方式の書店のことである。

我が家の近くに数年前にそのお店ができて、立ち寄っている。たくさんの小さな棚にそれぞれの本屋さんの名前があり、店主の選んだ本が並べられてある。一つ一つどんな本があるのか、この本屋さんはどんな人とか想像して、楽しみ、読みたい本が見つければ、買ったり、借りたりして読むことができる。小さな喫茶スペースがあるので、そこで読むこともできるので、私の老後の居場所である。

『本を読めなくなった人たち コスパとテキストメディアをめぐる現在形』 稲田豊史 中公新書ラクレを手に取った。

「大半の若者が、読書よりもずっと多くの時間を、ネット上のテキストを読むことに割いている。」と稲田さんは書き出す。「読書は『ながら』ができないからコスパが悪い」「読めないなら生成AIに要約してもらえばいい」「数百字のテキストより10分の動画」と次々と若者が本を読まない理由を挙げる。若者たちへの取材から見てきたことから、テキストメディアと読書の未来を考えさせる。

コスパとかタイパとか無駄なく素早くなんでもやってしまう現代社会から降りてしまって、のんびりボーっとする時を過ごしている今の私は、時代遅れの人間になってしまったようだ。積み上げた本を手に取り、ゆっくりその世界に立ち入ってみよう。

(磯部)



『レストレス・ドリーム』

笙野頼子

河出書房新社

(1994年 単行本)

(1996年 河出文庫)



夢の中の街スプラッタシティでの主人公桃木跳蛇(とびへび)と、その夢を見ている「私」が、夢を作り出している大寺院を破壊するため、そのシステム下のゾンビ達と死闘を繰り広げるのだが、大寺院を破壊しないと悪夢から出ることができず、また、ゾンビとの戦いで死んでしまったらゾンビになってしまう。悪夢の極みだが、現実社会を比喻している。

ゾンビ男はゾンビ女をデフォルトで虐げる。「アルハオトコ、ナイハオンナ」とゾンビ達は合唱し、男は男同士絶対に殺しあわないように等分に斬り合い、男は女を殺し、女は殺されて笑う。それが「男と女が相互に関わり合う」ということらしい。理不尽なゾンビ達が男も女も跳蛇に襲い掛かってくる。

あらゆるゾンビ達のボス？が「王子」なのだが、醜いことこの上ない。それでも「王子」なのは結婚させられるエンドもありえる(!)からか。跳蛇は第一戦では、王子の発した言葉に虚を突かれ、再戦するために一旦白旗を上げるのだが、無事に倒すことができるのかハラハラした。(ゾンビは自分の意識に侵入している外圧でもあるので、絶対になりたくない。)

ゾンビ達の攻撃に、ときにユーモアのある戦い方で向かう跳蛇は、はたから見たら狂気にもとれるルーティンをこなすのだが、それは狂気に満ちた世界を生き残るために編み出した必勝の策だ。果たしてゾンビ化せず、システムを破壊できるのか。

世で言う女の幸せとは本当に“幸せ”か？システムの作り出した地獄が、ロマンティズムで塗り立てられていると思う。30代でこの作品を作り上げた著者の新作『白内障完治年の老婆カレンダー』は、富豪たちの女体・子ども家畜化ゲームと言葉で闘う著者の闘病記だ。おれないう視点、体への配慮と観察が突き抜けている。併せて読みたい。(野田)

『女たちの避難所』

垣谷美雨

新潮社

(2014年『避難所』で

単行本)

(2017年改題して

新潮文庫)



—災害が起きると男性より女性の方が多く死ぬ。女性は幼い子どもや年寄りの世話で犠牲になる確率が高い—という統計があるそうだ。身体的に不利なこともあるだろうが社会的要因によるもの、となると看過できない。

この本では、東日本大震災で被災した3人の女性を軸に避難所での日々を中心にそれぞれの背景も語られる。

避難所のリーダーは男性で「互いに親睦を深めましょう。仕切りなんでものはいらねえです」と仕切りを使うことを認めない。作中の文章を借りるなら「あんた、馬鹿でねえの？家の中でさえ部屋はドアで仕切ってあるっていうのに」。

着替えも授乳もままならない状況を女子高生も子育て中の母親もすべての女性が耐える日々。「ここの女は常日頃から陰では自分の意見を言うが表では貝のように押し黙る。それが处世術だからだ」。しかし、生理用品や緊急避妊用ピルの配布まで男性リーダーが仕切り、この現状をなんとかしなければ、とついに女性たちが立ち上がる。

新リーダーとなった福子は女性の声に耳を傾け、言うべきことを行政に言い、周囲の協力と助けを得ながらひとつずつ避難所の問題をクリアしていく。状況の変化に伴い、別の問題が発生するのは通常の暮らしと同じ。これまでも「あった」問題が震災で鮮明になっただけと女性たちは気づく。

遠慮し、我慢し地域社会が回るように沈黙してきた女性たちは新たな一步を踏み出す。ここに光が見えることで読み手は救われる。

大きな地震が来ることが想定されている今、その時が来てしまった時の備えとして読んでみてはどうだろうか。(佐藤)

『どうして「体育嫌い」なんだろう ジェンダー・セクシュアリティの 視点が照らす体育の未来』

井谷恵子・井谷聡子
関めぐみ・三上純
大修館書店(2025年)



「体育嫌い」は、私にとっても遠い学校生活の苦い思い出の一つだ。本書は、ジェンダーとスポーツの専門家たちが、すべての人がポジティブに体育にアクセスできる未来のために、体育嫌いの課題に取り組んだ本である。

「体育嫌い＝スポーツ嫌い」ではない。体育嫌いな人は、例えば、男女で分けること、種目や服装が自由に選べないこと、などの強制を苦痛に感じるのであって、それは個人のせいではなく制度や仕組みの問題だ。本書では、まず体育嫌いの現実と、体育とはどういう教科なのかを示し、続いて「体育嫌い」の理由を女性、男らしさ、ジェンダー・セクシュアリティ、体育と競争という観点から分析している。更に、体育に多用される「競技スポーツ」の性質や社会全体に広がる競争に疑問を投げかけ、最後に、すべての人の「スポーツをする権利」を実現するための取り組みを示している。

特に、「体育の当たり前」の問題点の分析が興味深い。体育では、近代エリート男性の鍛錬から発展した「競技スポーツ」が圧倒的に多用される。そこには、性差別や異性愛主義、性別二元論、能力主義などの政治性が内包され、競争を前提とする。そのような体育のあり方が、様々な属性の人に苦痛を与える原因となっていると感じた。

一方、最近はいよ変化もある。中学校ではブルマが絶滅し、体操服は男女共通だ。種目もルールを簡単にしたティーベースボールやソフトバレーボール、競争要素のないダンス、持久走ならぬ時間走など、個々の能力に合わせて楽しめるスポーツも増えている。体育にかかわる人たちの、「誰もが生涯を通してスポーツすることを楽しんでほしい」という思いが伝わってくる。

(三好)

『なぜヒトだけが老いるのか』

小林武彦
講談社現代新書
(2023年)



生物学者で細胞の老化の研究をされている著者は、『生物はなぜ死ぬのか』(2021年)、『なぜヒトだけが幸せになれないのか』(2024年)と本書を含めた3部作を相次いで書いている。

2作目の本書では、「死」も「老い」も進化が生んだ「生命のしくみ」であるといい、人間にだけ「老い」があり、その「老い」には重要な意味があると唱える。

私が、当たり前と思っていたことで改めてそうだったのかと思ったことをいくつか。

- ・野生の生物は基本的に老化しない。野生で生きている生き物は、「食べる一食べられる」の関係で動きが悪くなるとすぐ食べられてしまうのである。
- ・脳と心臓の細胞は、新しくならない。
- ・本来の生物学的なヒトの寿命は、50～60歳。「哺乳動物の総心拍数は一生でほぼ20億回仮説」からの推定。
- ・老化は細胞が老化すること。DNA が壊れると老化する。脳と心臓の機能低下も老化の一因。

ヒトだけが獲得した「長い老後」には重要な意味があるのだという。それは、「おばあちゃん仮説」と「おじいちゃん仮説」と言われるのだが、詳しくは、読んでほしい。もう一つ、さらに長生きすると、特別なご褒美のような時間があると最終章で述べている。なるほど、そこまで長生きできたらいいなと思う。ぜひ、確かめてほしい。

生物学の第一人者である著者が、宗教や哲学ではなく、生命科学の視点から「老い」を語る。生物・物理・化学といったものから逃げ回っていた私には、読み飛ばしたページが多かったけれど、まさに老いの真っただ中にいて、身に沁みることもあった。

今をどう生きるか、どう老いるかを考える一つの入口かと思う。

(磯部)

地震と津波で生き残り、避難した3人の女性。彼女たちの行動にエールを送りませんか？

2026 年 9 月 6 日(日) 14:00～16:00

パートナーシップさいたま第 3 会議室 定員 24 名

地震や津波という緊急事態の時だからこそ、心の中の本心が表れる。男性優位の中で生きてきた男性は、本心をむき出しにして周囲を窮屈にする。声の大きいものが仕切ってしまう。『女たちの避難所』は、避難した3人の女性にスポットをあて、その心や行動を伝える。生死もわからぬ家族を思い、今日生きていくために必死になる。避難所を住みやすくしたい、自分の生き方をどう決めようか、3人は、行動しながら新たな自分を探し出す。

そんな彼女たちにどんなエールを送りたいですか？

『女たちの避難所』 垣谷美雨 新潮文庫(2017 年) <単行本『避難所』(2014 年)改題>

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。参加費 200 円。

事務局<磯部> 電話:048-641-3765 Eメール: i.sachie@nifty.com



■ パートナーシップさいたま耳寄り情報 ■

性暴力防止セミナー(オンデマンド配信・参加費無料)

「性加害者の治療から見えること ～300 名の性加害者少年たちと学ぶ包括的性教育～」

▶ 内 容

クリニックで性加害者へのプログラムをはじめてちょうど 20 年、10 代の少年たちの受診者数も 300 名を超えました。どんな累犯のハイリスクな性犯罪者にも「加害の扉が開くとき」があったことを、300 名の性加害少年たちが包括的性教育のプログラムを通して教えてくれました。現場から見えることを通じて、包括的性教育について考えます。

▶ 講 師

齊藤 章佳さん 西川口榎本クリニック副院長(精神保健福祉士/社会福祉士)

1979 年滋賀県生まれ。大卒後、我が国最大規模といわれる依存症施設である榎本クリニックにソーシャルワーカーとして、25 年にわたりアルコール依存症を中心に様々なアディクション臨床に横断的に携わる。その後、2024 年 10 月から現職。専門は加害者臨床で現在まで 3500 名以上の性犯罪加害者の治療に関わり、その家族支援も含めた包括的な地域トリートメントに関する実践・研究・啓発活動に取り組んでいる。小中学校では薬物乱用防止教育をはじめ、大学でも早期の依存症教育に積極的に関わっており、全国での講演も含めその活動は幅広くマスコミでも度々取り上げられている。東京都痴漢被害実態把握調査委員、一般社団法人痴漢抑止活動センターアドバイザー、一般社団法人関東交通犯罪遺族の会あいの会顧問、日本「性ところ」関連問題学会副理事長など。

▶ 配信期間 令和 8 年 8 月 3 日(月)から 8 月 31 日(月)

▶ 申込期間 令和 8 年 7 月 3 日(金)から 8 月 24 日(月)

▶ 対 象 どなたでも

▶ 詳細及びお申込みはホームページから

<https://www.city.saitama.lg.jp/006/010/002/004/p130395.html>



ホームページ

「ゆい」2026 年夏号 第 13 号 (2026 年 7 月 1 日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com

発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮3F 電話 048-642-8107

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>

